



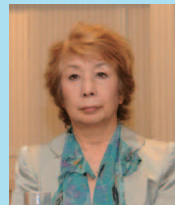
神奈川県遊技場協同組合  
「社会的弱者への思いやり特別支援年・5年」事業



神奈川県遊技場協同組合  
理事長  
伊坂重憲さん

選考理由

社会貢献活動審査委員会  
委員長代行  
脇田直枝氏



2000人も特別支援学校の子どもたちにクラシックを聴かせる。しかも、さまざまな障がいにも個別に対応したきめ細かな優しさ。そしてまた放射能汚染で帰宅出来ない福島県大熊町の町民の方々を横浜のクラージングに招待など、弱い立場の人々への「思いやり」が「大きな喜び」に転換され、県知事をはじめマスコミを通じて社会にその意義が広く伝わりました。今後の5年の、さらなる「思いやり」がどのように発展するか楽しみを見守りたいと思います。

新規・継続を含めた大枠のなかで  
思いやり事業を総合的に展開

組合が一丸となって社会貢献活動に尽力

神奈川県遊技場協同組合(以下、神遊協)は、傘下の支部組合、組合員ホールも含め、毎年のように優秀賞を受賞し、顕彰事業の常連ともいえる存在である。それだけ社会貢献や地域貢献活動が組合の文化のひとつとして根づいている証左でもあるのだが、「社会的弱者への思いやり特別支援年・5年」という総合的な社会貢献事業により、第8回社会貢献大賞に輝いた。

「娯楽産業として、これだけの規模を誇る業界ですから、社会的責任というものが当然あります。求められるものを必要とされる場所に提供したり、寄贈したりすることで社会還元を行うことを目標に、これまでも当組合ではさまざまな活動に精力的、継続的に取り組んできました。これまでの活動の集大成となるような事業、さらには遊技業界の将来を見据えたような事業をしていこうということで、社会的弱者への思いやりに焦点を当て、そのための特別支援態勢の確立を昨年の総会で決定し、さっそく昨年からは着手しました。一応、5年としたのは区切りのよさもありますし、5年なら組合が一丸となって息切れせずに事業に集中できるという思いがあったからです。今回の社会貢献大賞の受賞は、私たちの活動にさらに弾みをつけるものとして、伊坂理事長以下、関係者一同で喜んでおります」と、神遊協の前専務理事・上原昭次さんは語る。

今回の受賞対象となった神遊協の事業は、大きく分けると、①「ふれあいコンサート2012～音符にのせて笑顔届けよう～」、②ロイヤルウイング号スペシャルクルージング、③県内児童福祉33施設 スポーツ用具寄贈、④福祉車両贈呈の4つの事業で構成されている。このうち、ふれあいコンサートと福祉車両贈呈は継続事業とすることが決定されており、そのほかは状況や要望を考慮しながら、その時々にはふさわしい事業を実施することになっている。

2年越しで実現した「ふれあいコンサート」

「ふれあいコンサート2012～音符にのせて笑顔届けよう～」



開催した「ふれあいコンサート2012～音符にのせて笑顔届けよう～」



開催するにあたってスケジュールの調整などひとつひとつ丁寧に準備を進めた



黒岩知事が組合員と一緒に子どもたちにお土産を手渡す様子などが、地元のテレビ神奈川や神奈川新聞で報道された



神奈川県内の特別支援学校29校の児童・生徒、引率の教師、保護者を合わせて約2000人を招待した

よう～」では、2012年5月30日・31日の両日、横浜みなとみらいホール大ホールを会場に、神奈川県内の特別支援学校29校の児童・生徒のほか、引率の教師、保護者を合わせて約2000人を招待し、神奈川フィルハーモニー管弦楽団によるコンサートを開催した。この事業は、特別支援学校に通学する子どもたちは公共施設でのオーケストラの演奏を聴く機会が少ないことから、本格的なフルオーケストラのコンサートに招待することで、音楽を通じて幅広い知識と教養を高め、勇気や生きる力を持ってもらいたいという願いで企画された。

「組合として文化的な社会貢献事業の経験を積みたという思いが、ふれあいコンサートに結実したといえます。実は2011年に1回目を行う予定でしたが、東日本大震災

があって実施を見合わせたため、2年越しでの実現となりました。ホールやオーケストラの都合に加え、学校教育の一環としてのコンサートという位置づけのため、その日程調整が大変でした。これは県の教育委員会や特別支援学校長会にご協力いただきました。さらに、子どもたちに楽しんでもらえるよう、『崖の上のポニョ』の主題歌も演奏を入れるなど、曲目の選択にも配慮しました」と、上原さん。開演前の出迎えや開演後のお土産の手渡しを含め、耳の不自由な子どもに対する骨伝導装置の用意、車椅子への対応、休憩室の準備、看護師の配置、プライバシーへの配慮など、ひとつひとつ丁寧に準備を進めていったという。

そうした努力が実り、当日のコンサートは大成功。参加



した子どもたちへのアンケートでは、「コンサートは初めてだったので、すごく感動した」、「楽しい曲ばかりで音楽に興味を持てた」、「生演奏を初めて聴いたが、すごく迫力があった。また生のオーケストラを聴きたい」、「崖の上のポニョがよかった」といった声が寄せられた。学校関係者からは、「単なるコンサートではなく、フルオーケストラを体験させることができたことはすばらしい」、「各学校ごとに案内人を配置したり、席の区割りなどの細かい配慮がとてもありがたかった」といった評価があった。また神奈川フィルの指揮者や演奏者も、自分たちの演奏に子どもたちが喜び、興奮する姿を見て、「こんなに楽しいコンサートはなかった」と振り返っていたという。共催の神奈川県からは黒岩祐治知事も参加し、最後に組合員と一緒に子どもたちにお土産を手渡す様子などが地元のテレビ神奈川や神奈川新聞で報道され、反響を呼んだ。



県外で慣れない避難生活を送る方たちにとって、すばらしい思い出になった

### 招待や寄贈だけでなく現場で汗をかく

ロイヤルウイング号スペシャルクルージングは、東京電力福島第一原子力発電所事故による放射能汚染で福島県大熊町から神奈川県などへ避難を余儀なくされている方々46組・137名を招き、夏のひとときを過ごしていただくと共に、離れ離れになった大熊町民の交流の場になればとの思いから、神奈川県の協力も得て実施したものである。船は8月25日に横浜港大榎橋埠頭を出港、横浜の夜景を見ながらの豪華ディナー、モノマネ芸人によるステージ、けん玉パフォーマンス世界一によるけん玉教室、クルーズスタッフのテーブルマジックなど、盛りだくさんの内容だった。参加した大熊町役場の秋本昌寿課長補佐から、「県外で慣れない避難生活を送る私たちを、豪華ですばらしいイベントにご招待くださり、ありがとうございます」というあいさつがあり、あわせて前年度に神遊協から県内に避難している被災者世帯に贈られたエアコンや掃除機に対するお礼の言葉もあった。なお、このクルージングには、大熊町民のほか、抽選で選ばれた一般の遊技ファン150名も招待された。



ロイヤルウイング号の前で招待客を出迎える組合員



クルージングではモノマネショーや食事を楽しんでもらった



県内にある児童福祉施設33施設に対して、各種スポーツ用具を寄贈



福祉車両贈呈式の様子。これまでの寄贈台数は200台を超える



神奈川県内にある児童福祉施設33施設に対して、野球・ソフトボール用具一式、卓球・バドミントンセットなどの各種スポーツ用具を寄贈する事業は、社会福祉法人神奈川県共同募金会を通じて行われた。「こうした施設の入所・通所者同士は、スポーツ大会やレクリエーション活動などを通じて交流をしていますが、自前では新たな用具購入が難しく、さまざまな方面に助成を要望しているということを知り、私たちに応援できればということでの今回の寄贈となりました」と、上原さん。

また、神遊協と神奈川福祉事業協会が長年にわたって続けているのが、県内の児童養護施設や障がい者福祉施設、高齢者福祉施設などに対する昇降台や自動式リフトなどが搭載された福祉車両の贈呈だが、昨年も13施設に対して各1台、計13台が贈られた。この事業は1985年から継続して行われてきているが、その事実を広く神奈川県民に知っていただきたいということと、贈呈先施設の偏りなどを防ぐため、2008年度からは一般公募方式に切り替えられた。毎回、多くの施設から応募があるため、

昨年より贈呈する車両数を増やしたという。昨年までの寄贈台数は200台を超え、県内の多くの社会福祉施設で利用されている。

こうした事業のほかにも、神遊協では児童福祉施設などの子どもたちをポリシヨイサーカスの公演に招待したり、障がい者福祉施設の方々に対する北海道や沖縄への「車いす空の旅」などの事業を行っている。こうした事業は、神遊協の理事会内に設けられた経営事業委員会、広報委員会、さらには事務局などが中心となって企画・実施されているが、「理事会で実施が決定されれば、組合が一体となって、全員参加で行われる」と、上原さん。しかも、「理事長以下、精力的に社会貢献活動やボランティア活動に取り組み、現場にも足を運び、とにかく自分たちで汗をかくことをモットーにしています。やはり現場に行かないと、本当に必要とされているものや課題がわかりません。そうした経験を積み重ねることが、組合全体の財産になっていきます」と話す。今後も神遊協の社会貢献活動に注目していきたい。